交通安全意識と御守

井澤正裕*

現代の車社会において、交通安全の御守は予期しえぬ事故からわが身を守る護符として、数多い御守のなかでも最も広く普及し、その種類、形態も多様化している。それはまた純粋な信仰心の反映であるとともに交通安全の御守そのものが習俗化し、ファッション化した結果ともいえる。しかし御守が人々に与える心理的な安堵感は、今後も重要な意味を持ち続けるだろう。

Traffic Safety Consciousness and Good Luck Amulets

Masahiro IZAWA*

In today's automobile-oriented society, amulets for traffic safety have become the most widely disseminated of all the different types of amulets, becuase of their role as good luck charms to ward off unexpected traffic accidents. They come in many different types and shapes. This phenomenon is not so much a reflection of genuine faith, rather traffic safety amulets have become part of the popular culture, and of people's fashions. Be that as it may, we can expect these good luck charms to continue to provide some form of psychological peace of mind to people, and in that sense, they will continue to have a great deal of significance.

1.「旅」から「レジャー」へ

交通機関が未発達で、旅が辛苦であった時代には、遠方への旅立ちは永遠の別離さえ予想しなければならなかった。そのため旅立ちに際しては、家族や知友が多く集まり、送別の宴が催され、最後には水盃が飲み交わされもした。道々にはその道中を守る神（道祖神・馬頭観音等）、あるいは峠の神が祀られ、旅人はこれらの神々に柴や花、または食物、幣帛などを手向け、道中の安全を真摯に祈願した。

モータリゼーションの発達した現在では、こうした道々の神に対して人々が直接交通の安全を祈願する姿は見られなくなった。これらの神々は人々の意識から姿を隠したといってもいいだろう。旅の受け止められ方は、中世の死と直面した旅から、近世以降の行楽的意味が込められた旅へ、そして現代のレジャーへと時代とともに大きく変化し、それにともなう安全祈願の形態も異なってきた。

「旅」から「レジャー」へ、これは単に表現上のみの問題ではない。その言葉の背後に横たわる宗教的世界観の変容を如実に物語るものといわなくてはならない。その端的な例が交通安全の御守や社寺における祈願、車祓いである。

2．車社会における御守の位置づけ

最近では特に、日常化した交通災害に対して有名な社寺で交通安全の祈願、または新車を購入した際には車祓いを受ける人々が増加してきている。またこうした安全祈願、車祓いを直接には受けられなくても、その社頭の札所で交通安全の御守を受ける人の姿が多く目につくようになってきた。交通環境が整備され、また如何に交通規則が十分に考慮されていても、交通災害はあくまでも不慮の事態であるため、こうした実情の反映ということができる。それは一方では、モータリゼーションの発達と交通環境の整備が、全国の著名な社寺に参詣したいという信仰的な願望を容易に満たしうる条件を整えた結果ともいえる。人々は、あるいはドライブを楽しみながらも、多少離れた社寺でも気軽に参拝できるのである。新車の試運転を兼ねて出かけて行く場合もあるだろうし、あるいは信仰とはかけ離れて、有名な社寺のステッカーを貼るという単なる軽い気持ちの場合もあるのかもしれない。

* 神社本庁調査部録事
Research Department,
Jinja Honcho
(United Shinto Shrines Association)
原稿受理　昭和60年7月5日

3．交通安全の御守の起源と性質

社寺で授与される御守は、普通には神札、守札、あるいは神符などと別称され、または神符守札と一口で言い続けられたりもしている。概念的には神札と神符（御守）とは区別すべきものであって、実際その形態や扱いを異にしているわけであるが、一般的には余り意識されずに使用される場合が多い。

神札は専ら家庭の神棚などに奉斎される。これは神霊の宿れる、もしくは神威の籠れるものとして家庭祭祀の中心をなす、いわゆる拝礼の対象となるものであると一様の定義付けを行うことができる。これに対して御守は、神札と同様に神霊の宿れる、もしくは神威の籠れるものとされているが、どちらかといえば直接に拝礼の対象となるものではなく、むしろ身に付けることによって、様々な災厄からの守護安全を期待するものといえる。こうした社寺より授与される種々の御守は、近世以降特に盛んになるわけであるが、その起源は恐らく道家の「符」にちなむものであるという指摘がなされている。

今日一般にいうところの交通安全の御守とは、神道の信仰でもある分霊によるもの、またその神威によって様々な災厄を除去しようとするものとに分けて考えることができる。その意味では、交通安全の御守は、後者の護符的性格をより強く持つものであるということができる。御守には、神威の籠れるものとして、不慮の交通災厄から直接に身の安全を守ろうとする強い願いが込められているのであろう。

4．多様化した交通安全の御守

社寺から授与される御守には、交通安全の他に開運厄除、初宮、縁結び、学業成就、安産、病気平癒などがあるが、この各種御守のなかでも最も多く授与され、またその種類が多様化しているものは、やはり交通安全の御守といえそうである。残念乍ら全国的にどのくらいの御守が授与されているのかは把握できないが、いずれにしても今日的現象として注目されるところでもある。種類形態に至っては、各社寺が最もその信仰を流布するに相応しいと考えるものを工夫して授与するようになってきている。

その形態は肌身に付けるもの、車に付けるものに大別される。主なものを列挙すれば、自動車に付ける金襴製御守、綿袋入肌守、安全祈願を済ました自動車免許証入、エッチング加工が施された金属性ステッカー、樹脂製で螢光塗料が施されたプラスチック製反射御守、また各種キーホルダー等々がある。これらのなかでも特にステッカー、キーホルダー型の御守は新しい部類に入り、様々な意匠が凝られたものが多い。

5．すすむ御守の習俗化

このような交通安全の御守は、学業、縁結び、厄除、初宮などの御守が特定の人に対して授与されていくのに対し、授与される対象が年齢的にも各層にわたっていることを、特色の一つとして掲げることができそうである。またこのことがさらに一層御守の意匠を凝ったものにし、種類も多様化させる結果をもたらしている。

交通環境が整備され、様々な安全対策が施されるにしても、交通密度の増大によって、かえって人々の言い知れない不安は募るものといえる。こうした不安に対して人々は、事故に際しての物資的保障が約束された各種保険に積極的に加入し、またその保障額も高額になっているのが現状である。しかしこうした災害を前提とした保障では、やはり人間の本質的な意味での心理的不安は癒せないようである。物質的保障では満たすことのできない不安、その不安に対して交通安全の御守は、信仰的意味も含めて一方で心理的な安らぎを与える効果をもたらしている。今後とも交通密度が増大していく過程で、交通安全の御守も不確実性を満たすものとして、社会的な受け止められ方によっては、習俗化していく傾向を持つのではないだろうか。

御守を肌身や車に付けることによって、いつ起こるとは知れない災害に対する不安を除去する心理的効果を期待する傾向が交通安全の御守をより一層護符化していくことは否めない。また信仰的動機が習俗化していくなかで平準化されていくのであれば、御守のファッション化がもたらされることになる。これは御守から本来の信仰的意味が喪失され、御守が自動車のある種の部品化するという謂である。しかしこうして御守がファッション化されるにしても、交通災害に対する不安は本質的に取り除かれるわけではない。あるいはこれを満たすべき新たな形象化がもたらされるだけなのかもしれない。

いずれにせよ交通災害は、現代人にとって大きな問題であり、いつかは克服しなければならないものである。今後とも交通安全の御守は、信仰的動機をもとに、交通災害に対する心理的克服のそなえとして重要な意味を帯びてくるものになるといえよう。